
Le Gibet

一宮 集

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Le Gibet

【Nコード】

N5340H

【作者名】

一宮 集

【あらすじ】

左の網膜に焼きついた骸骨。中空に吊られたそれは、絶えず僕を唆す。理性など捨ててしまえと。衝動に身を任せろと。執拗に、熱心に、破滅への道を説き続けるのだ――

彼の存在に。

僕は、ようやく気付いた。

左の網膜に焼きついている、一人の男。

吊られた骸骨は、僕の視線の上を当てもなく彷徨って。

何処にも落ち着くところがないように見える。

そう。

僕は、彼から逃れられない。

多分、永遠に。

「…古沢」

「はい」

「またお前だけだぞ。提出してないの」

意地悪な教師が言う。

革製の鞭を僕の咽喉元に突きつけながら。

「…提出期限は、明日って言ってたじゃないですか」

「明日だとしてもだ。他の連中はもう今日までに持ってきてるんだから」

「……」

「親父さんが死んで腑抜けになってるのは判るがな。いい加減しっかりしてくれないと」

「…でも」

僕が、口を開きかけた途端。
鋭く空を切る音がして。
左肩が、裂ける感触がした。

「教師に口答えするなんざ、百年早いんだよ」

蹲る僕に。

なおも、振るわれる鞭。
クラスメートは、くすくす笑って。
眉を顰める者すらいない。

繰り返される体罰に耐え。
両腕で、頭を庇いながら。
体が小刻みに震えてくるのが判った。

僕は、恐ろしいのだ。
怒りを露わにすることが。
そんな時。

必ず、彼が現れて。
僕を誘惑し、煽動するから。
あいつを見ろと。
俺にやらせろと。

「…何だ？」

僕が顔を上げ、教師を見つめると。

たちまち、僕は僕じゃなくなっていく。

その現象に。

僕は、抗うことが出来ない。

「何か文句でもあんのか？それとも、病気のおつかさんに言いつける気か？」

奴が得意気に、そいつを振り下ろそうとした瞬間。

体は、勝手に動き出す。

僕は咄嗟に鞭を奪い取り、奴に馬乗りになって。

その首に、二重、三重に革を巻いていく。

周囲の悲鳴と、奴の呻きが聞こえるより先に。

僕の両手は、きりきりと奴を締め上げていく。

先生の醜い顔は、みるみる紫色になって。

両手は、僕を殴ろうとするけれど。

僕が両手に力を込めていくと。

奴は、みっともなく舌を突き出し、もがいて泡を吹き、小便を漏らし始める。

その様を。

僕は、黙って見下ろしている。

やがて、その体が大きく痙攣し。

全ての動きが途絶えるまで。

はっと、気付いた時。

僕は、廊下に転がされていた。

まみれている血は、自分のもので。

あの教師のものではない。

激痛に身を震わせながらも、僕は密かに喜んだ。

今度も、僕が勝ったのだと。

彼の衝動を、僕の理性が押さえつけたのだと。

クラスメート達は、とっくにいなくなっていて。

暴力教師の姿も見当たらなかった。

美しい夕陽の差し込む廊下を、よろめきながら歩いている間も。

左目の中には、恨めしそうに僕を見詰める彼の姿があった。

あと少しだったのに。

そう、言わんばかりに。

家に帰ると。

学校から、連絡が入っていたようだった。

母親は病床を抜け出して、僕の帰りを待っていた。

「あんた、また先生に反抗的な態度取ったんだって？」

「そうじゃないよ。あれは完全に言いがかりで…」

「これ以上騒ぎを起こしたら退学だって。凄い剣幕だったわよ！」

「だから、そうじゃないって…」

僕は懸命に、事態を説明しようとしたけれど。

母親は聞いてはくれない。

頭ごなしに僕を叱り、喚き散らすだけ。

「とんだ迷惑よ」吐き捨てるように、母親は言う。「あんたなんか産むんじゃないわ」

「誰が、産んでくれって頼んだよ？」

「ああ、もう、そういうところまで父親そっくり。理屈っぽくて、怒りっぽくて」

髪を掻き毟ると、母親は、くるりと踵を返す。
まるで、僕なんか見たくないとでも言うように。

「お兄ちゃんやお姉ちゃんはあるにいい子なのに。何であんたはあのように似たんだろうね」

「……」

「とにかく、明日、先生に謝りなさいよ。あんたのせいで、何であんたが怒られなきゃならないんだか…」

—— やめろ。

やめてくれ。

それ以上言うな。

僕は、そう祈っていたけれど。

母親の罵詈雑言は止まらない。

「体が弱くて、問題児で。ほんと、どうしようもないわよね。いつそ、あの事故の時、死んでくれれば良かったのに」

母親の赤いガウンを見つめる僕の目に。

再び、彼が現れる。

左右に揺らぐ、透明なしゃれこうべ。

微かに、笑っているようにも見える。

そして。

僕はまた、自制を失いそうになる。

傍にあった果物ナイフをひっ掴むと、母親の背後に歩み寄り。

迷わず、その背中を突き刺した。

悲鳴を上げる隙もあらばこそ。

振り返ったところを、縦に切り裂くと。

鮮血が、たちまち溢れ返ってきて。

ベージュ色の直腸がこぼれ落ち、黄色い脂肪がめくられて見えた。

次に。

彼は、首を横に掻き切ろうとする。

もう二度と、誰かの悪口を言えないように。

…彼？

そこで。

僕はようやく、自分を取り戻す。

ナイフを皿の上に置き、血中のアドレナリンを呼び返し。

カーペットの上にへたりこんで、きつく目を閉じる。

これは妄想だと。

単なる願望だと。

自分の中に潜む殺意を、狂おしいまでの衝動を、必死に押し殺しながら。

そんな僕を。

彼はやはり、つまらなそうに見ている。

透明な眼窩を向けながら。

腑抜けな僕を、晒っている。

陰気な空気から逃れるように。

僕は、外へ出る。

どうして、こうなってしまったのだろう。

僕はいつから、こんな恐ろしい人間になってしまったのだろう。

お願いだから。

誰も、僕に近づかないで欲しい。

僕を怒らせないで欲しい。

もう二度と、こんな思いはしたくないから。

降り始めた雨を避けるように。

人々は、地下街へ潜っていくけれど。

それに逆行して、僕は歩き続けた。

とにかく、一人になりたくて。

近くにある公園へ向かっていたのだ。

大きな噴水の淵に。

一人の女子高生が腰掛けていた。

長い茶髪に、短いスカート。

これ見よがしに、高々と脚を組んでいる。

でも。

僕が、傍を通りかかった時。

彼女は、携帯を盛んにいじりながら。

汚らしいものでも見たかのような視線を送ってくる。

「あのさ、雨降ってきたんだけど。待ち合わせ場所変えていい？」

殊更大きな声で、彼女は言う。

あからさまに、僕を睨み付けて。

「て言うか。何か、変なのがいんだよね。キモいんだけど。消えてって感じ」

その言葉に。

僕は耐え切れず、早足で去ろうとしたけれど。

彼女は、なおも言う。

「でもさー、あたしがちょっとガン見したらさー、マジビビってんの。逃げんの。超受ける!!」

その言葉に。

彼はまた、反応してしまう。

いけない。

こんなことぐらいで。

僕は必死に、押しとどめようとしたけれど。
体は、勝手に動いてしまう。

「え、何? こっち来たんだけど!」

彼女の驚く顔が、目前に迫ったかと思うと。

僕の手は、その肩を押して。

彼女を、水の中に突き落としていた。

それから。

長い髪の後ろから、首を掴んで。

抵抗する体を、押さえつけていた。

彼女が派手に水飛沫をあげ。

もがき、苦しむ姿を中庸に見下ろしながら。

その動きが、呼吸が、完全に止まるまで。

はっと、我に返ると。

僕は、公園のベンチに一人きり。

彼女の姿は、何処にもなかった。

また、妄想か。

僕は、安堵の溜息をついたけれど。

同時に、酷く疲れてもいた。

骸骨は相変わらず、左目の中で揺れていて。

僕がそれを実行に移さなかったことを、悔しがっているようだった。

あの事故以来。

僕はこんな妄想に、日夜悩まされていて。

自分が狂気の境にいることを、嫌でも思い知らされた。

仲の悪い友人を刺し殺し、口うるさい近所の主婦を絞め殺し。

悪態をついた幼児を突き落とし、割り込みした老婆を殴り殺し。

のちに、それが幻覚であることを知り。

そのたびに、激しい後悔と自責の念に駆られていたのだが。

もう、限界だった。

ポケットに収めた、護身用のナイフ。

僕はそれを取り出すと、手に取って眺めてみる。

思わぬ武器を前にして。

骸骨は途端にはしゃいだ。

今すぐ殺れ、と。

恨みを晴らすのだ、と。

でも。

些細なことで、すぐにかつとなる自分のことを。

抑えることに、いい加減疲れていた。

だから。

とにかく、楽になりたかった。

自由になりたかった。

憤怒とも衝動とも、無縁な世界へ行きたかった。

そして。

あの頃に戻りたかった。

無条件に、人を愛することの出来た頃に。

誰かを信じ、誰かから信じて貰えた、幼い頃に――

「―― 検死結果、出ましたか」

「ああ。さっき報告を受けた。腹部の傷が致命傷だったようだ」

「つまり、事件性はないってことですね」

「まあ、そうなんだが。可哀想にな。まだ高校生だろう？」

「そうですね。父親を亡くして以来、ノイローゼだったみたいで」

「遺書代わりに残されたノート、さっき読んだけど。凄まじかったよ」

「そうらしいですね」

「自分だけ生き残ったことと、親父さんの角膜を貰ったことが、相当ショックだったらしい」

「まだ、見つかっていない方でしたか」

「そう。確か左目だ。丁寧に、えぐり取られてた方な…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5340h/>

Le Gibet

2011年1月7日02時59分発行